

造形芸術科における図書館との連携による取り組みについて

(実践的課題の設定と作品展)

青柳 泰生・玉生 美智子

専攻科造形芸術科では平成26年度より市川市の図書館と連携したいくつかの試みを行っている。図書館内に設けられたギャラリーでの生徒作品展開催をきっかけに、造形芸術科生徒の学習に興味をもっていただき、本校生徒へのデザイン依頼について相談を受けた。ギャラリー展示の宣伝ポスターについてはこれまで運営会社で全て制作を行っていたが、年間の企画の内のいくつかを本校で担当することになった。その他、図書館のイメージ戦略に関わるデザインについても依頼を受け進めている。生徒作品展は毎年開催する機会を得て、地域資源をいかした学習を深める取り組みが継続されている。この連携により生徒の主体性や自主的に制作に取り組む態度、および実社会における仕事を意識した態度が見られるようになった。

キー・ワード：実践的課題 外部機関との連携 コミュニケーション能力の育成

1 はじめに

本校専攻科造形芸術科では創作活動をととして専門知識や技術、責任をもって制作活動をやりとげることにより自己肯定感を身につけることを目的とし、社会自立にむけて様々な学習を行っている。造形分野では、作品の受け手からの意見や感想がフィードバックされることやデザイン分野でのクライアントの意見を元に制作することなども重要である。これらの活動により視野が広がり、制作に多様性も生まれる。生徒たちは積極的に表現を追求し創作活動を進めているが、経験の少なさから客観的な視点をもつことが苦手である。そこで外部の機関と連携した活動に生徒の意識変化をねらい、実施している。この図書館との連携もそのひとつである。

2 実施目的・内容

- ・外部と連携した実践的課題を行うことにより自己の制作をふりかえる客観的視点を養う。
- ・クライアントを意識した制作を通して、納期やニーズに対する誠実な態度を育成し社会的な約束事を理解させること。
- ・校外での作品展開催により制作活動への責任感と

自己の作品を様々な人に見てもらえる達成感や肯定感をもたせること。

3 実践的課題の設定

連携が始まった当初より図書館内のギャラリーで毎月開催される展示の宣伝ポスター、図書館のロゴマーク、キャラクターなどのデザイン依頼があり、生徒の適性に応じて振り分けて担当させている。生徒によっては配色や構成に時間を要する者もあり、また、進路実習をおこなう時期などもあるため、ギャラリー展示の年間の開催スケジュールとの調整を行い、個々の生徒が力を発揮しやすい割り振りを心がけている。

(1) 展示の宣伝ポスター制作

① クライアントを意識した制作指導

はじめにデザイン作業全体の流れと仕事量を示し、指定した期限に間に合うよう計画を立てさせている。

実在のイベントポスターの制作では盛り込むべき情報が具体化する。これによりポスターの役割が理解しやすくなることを利用して視覚情報の整理が大切であることを認識させた。(図1)(図2)(図3)のポスターに見られるように、各展示内容について、ふさわしい表現となるようイメージしたアイディアス

ケッチに基づき「文字」「図」を、適切な大きさ、形、配色で複数パターン制作させ、比較させた。このことにより生徒の意識の中に、受け手の側を考えて制作を行う姿勢が少しずつ見られるようになった。また、クライアントと依頼された仕事の具体性を意識させるために、要望や指示された内容が反映されているか生徒自身に図書館へ直接確認させることで、デザインには相手の要望があることを理解させることができた。

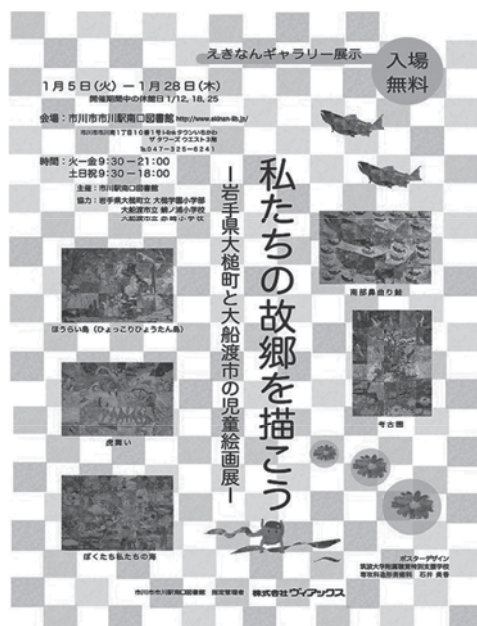


図1 生徒が制作したポスター（1）



図2 生徒が制作したポスター（2）



図3 生徒が制作したポスター（3）

②クライアントとのデータのやりとり

造形芸術科では生徒個人にパソコンを割り当て、就職活動や日常の課題等もメールでやりとりを行っている。そこで図書館からの仕事もメールを使用して実践的に行うことにした。先方からの依頼の要旨、掲載文章、本校からの確認やデザインの提案については全てメールで行い、一部のデザイン素材（写真等）の受取や入稿データなど、メール添付では対応できないものについてはオンラインストレージを利用してやりとりを行っている。

生徒にはデータ入稿のルールやデータ形式などを説明し、相手に必要な形にする方法を習得させている。自らの制作物に対して入稿するまで責任をもつ姿勢は卒業後の仕事においても重要なため、時間をかけて丁寧な指導を心がけている。

(2) ロゴマークのデザイン

図書館からの依頼により、図書館のロゴマークデザインについての学習も行った。デザインの条件として、地域にある各図書館がもつイメージカラーのうち、南口図書館がもつ黒を基調とすること、次に正方形の中に収まるデザインとし、ロゴについてはひらがなの「えきなん」を用いることが依頼された。限られた条件の中でシンプル且つ洗練されたかたち

をつくり出すことは、自由な表現ができる絵画制作と異なり、依頼者の意図を丁寧にくみ取っていくことが必要である。このことをはじめに生徒に理解させいくつかのラフスケッチを考えさせた。(図4)



図4 生徒のラフスケッチ

具体的なイメージを単純化し、構成していくことは生徒にとっては基礎的なデザインの力が求められるため、構想の段階から苦勞する様子も見られた。まずは指導にあたり、一般的な図書館のイメージを言葉で書き出させ、具体的なかたちを単純化していく手順を示した。要素となるモチーフを絵画的に描写することから抜け出せずにいた生徒も少しずつ線や面を単純化していくことを理解し、まとまったデザインの案がいくつか出てくるようになった。できあがった案はパソコンに取り込み、描画ソフトで加工を行った。(図5)



図5 パソコンでの加工後のイメージ

細部の調整等については指導担当者が行った後、図書館の担当者に提示することができた。今後は絞り込んだ候補から1つを選び、修正を行っていくことを予定している。図書館とのやりとりは当該生徒については教員が間に立って指導を行ったが、直に依頼を受けて作業をすることで、より実務に近い経

験をさせたいと考えている。メールなどを利用しながら要望を聞き、連絡調整を行うことはデザイン以外の仕事にも通じる重要な力と言える。しかし、そこには相手が依頼するイメージを理解し、確認をするための基礎的な言葉の力が必要とされ、この点においてはまだ課題を残している生徒もいる。抽象的な言葉を色や形と結びつけるこれまでの指導の上に、コミュニケーションを図りながらお互いの合意をさぐるための力を育成する指導を行っていきたい。

4 生徒作品展の開催

(1) 作品展準備への関わり

① 出品作品の決定と展示

造形芸術科ではこれまで卒業制作展やその他の作品展に出品する際に、展示にふさわしい完成度や、作品の統一感の有無を考慮して出品作品をリストアップする作業を行ってきた。生徒が自身の作品をふりかえり、生徒自らの作品展であることを意識させることにおいても図書館展示は貴重な機会となっている。また、搬入に際しては作品を保護するために必要な梱包方法を説明し、安全に運ぶことを考えさせるとともに、展示形態までを想定した作品制作を心がけさせている。自らの意図が伝わるような見せ方を考えさせることも作品展ならではの学習機会と捉えている。

② 作品展の見学

作品展の見学は毎年8月末の特別実習期間中に行っている。展示ギャラリーは書架に近い壁面に設けられているため、展示そのものを鑑賞する人以外にも、利用者が本を探しながら何気なく視線を向けた先に作品を目にすることができる鑑賞形態となっている。静かな図書館の中で展示される経験はほとんど無いため、公共の場の中に溶け込んだ自分の作品を見る喜びは他では味わえないものがある。図書館利用者の視線を意識した見学を行うことで、生徒の中にも作品が多くの人に見られるという意識がめばえ、次の制作に対する姿勢にもさらに意欲が感じられるようになった。



図6 展示会場



図7 見学の様子

5 結果と今後の課題

図書館とのこれまでの連携を通して、ポスター制作を担当した生徒の意識変化はメールでのやりとりや、事後指導の過程で見られた。確認したい事柄や伝えたい内容を整理することで、受け手の側の立場を考えて文章を作成しようとする意識や制作を振り返って、自らの制作の進め方を反省する発言もあった。また図書館宣伝物を担当した生徒には、クライアントの要望を理解し、複数のアイディアを提供することの必要性を感じ、様々な事例を参考に試行錯誤した様子が見られた。このことはクライアントの要望を感じ取りながら、あらたに作り手の側から提案していく、より高度なデザインの作業への展望が期待される。

展示作品のリストアップにおいてはキャプションに記載するための作品情報が必要となり、この作業

についても生徒が主体となり、作品情報を友人と揃えて表記する動きが見られた。こうしたことから作品を外部に発表する際に必要な手続きの一端を理解できたのではないかと考えられる。

連携当初、図書館との連絡はほとんど教員が行っていたが、生徒本人が直にやり取りをする方向へと少しずつ移行させたことによって生徒の意識変化に大きな効果があった。しかしこのやりとりを行う上では前述のように個々のコミュニケーション能力や言語力の問題が大きく関係する。その指導のために、デザインの指導中に他の学習内容の説明に費やす時間も増えてきている。この取り組みに必要な学習内容は多岐にわたることや、限られた時間を効率良く使うことが必要だと考えている。今後は他教科と指導内容を関連付けていくことで生徒の総合的な力の育成に努めていきたい。

〔謝辞〕

本研究で報告した取り組みは、市川市市川駅南口図書館との連携協力により実現したものである。市川市市川駅南口図書館 館長 山口真 氏、図書館の運営会社である株式会社ヴィアックス 図書館事業本部 沖祐也 氏にはこの取り組みに際して多くの協力をいただいた。ここで深謝の意を表する。

〔付記〕

本研究は、平成28年（2016年）第50回全日本豊教育研究大会附属大会において発表したものである。